

会津大学短期大学部研究年報第54号 pp. 11～ 28 (1997)

漱石とハーンの神秘主義

近 藤 哲

はじめに

夏目漱石(1867-1916)が英国留学から帰国し、東大の教壇に立ったのは明治36年4月のことである。それは一片の紙切れで突然大学当局から解雇されたラフカディオ・ハーン(小泉八雲 1850-1904)の後任としてであった。東大講師就任は漱石の予想もしなかったことで、戸惑いがまったくなかったわけではない。「小泉先生は英文学の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方であるのに、自分のような駆け出しの書生上りのものが、その後釜に据わったところで、到底立派な講義が出来るわけのものでもない。又学生が満足してくれる道理もない。」(1)と、ハーンの後任者としての力不足を率直に語っている。またハーン解雇を契機に、熱烈にハーンを崇拜していた学生達の激しい留任運動も起こっており、その余蘄の冷めやらぬ中で教壇に立った漱石が学生達にとって歓迎されざる教師であったことは、『人間漱石』(2)や『英文学形式論』(3)の「はしがき」に詳しく述べられているところである。

漱石とハーンの履歴上の接点はこの偶発的事件くらいで、両者の直接の出会いは無かったらしい。翌年9月に没したハーンは漱石の名さえ知らなかったかもしれない。しかし、こうした事情にもかかわらず、漱石のハーンを偲ぶ語り口に苦みは無い。それどころか文学上の優れた先輩としてハーンを意識し敬愛していたことは、漱石の幾つかの作品や書簡などでのハーンへの言及から窺われるところである。例えば『三四郎』三には、講義が済むといつでも池の周囲を散策していたハーンの姿を親愛の情を込めて描いているし、あるいは、「巻頭のハーン先生へのデジケーションは甚だ結構に候いまだ日本の著書にて八雲先生に捧げたものは一つも無之大いに嬉しく存候。」(大2. 1. 11 付大谷正信宛)という一節もあり、ハーンへの親近感、尊敬の念はかなりのものであったと推測することができる。

漱石文学草創期の作品である『吾輩は猫である』一が『ホトトギス』に掲載されたのは明治38年1月であり、最後の十一は翌年の8月(同誌)である。『濛虚集』所収の7つの短編群——『倫敦塔』・『カーライル博物館』・『幻影の盾』・『琴のそら音』・『一夜』・『菴露行』・『趣味の遺伝』——のうち第一作品『倫敦塔』の発表は38年1月(『帝国文学』)であり、最後の『趣味の遺伝』は翌年の1月(同誌)である。つまり『猫』と『濛虚集』は同時期に並行して書かれていたのである。両者の文学世界はその持つテーマ、モチーフ、スタイルなどから大きな違いがある。単純化してしまえば、一方は周囲の現実界の種々雑多な現象を猫の目を借りて描写した諧謔の文学であり、他方は幻想・空想・幻影の世界、あるいはそれらと現実界が交錯する神秘の文学である。一人の作家がこの二系列の文学世界を同時に構築していったこと自体興味深いことであるが、本論では、主として、『趣味の遺伝』とハーンの“By Force of Karma”(「因果の力」)の比較検討

を通して、漱石とハーンの超自然的、神秘的文学について述べてみたい。

1

『趣味の遺伝』で、漱石は若い男女の一目惚れの神秘を解明しようとした。ある時空において偶然出会った二人が、しかもほんの束の間目と目を合わせただけの二人が、相思相愛の感情を感得するという宿命的な出会いの謎を、漱石は、「学問読書を専一にする身分」(4)の「余」に「学問的に研究的に調べ」させ、説明させようとした。

「余」は、凱旋する兵士達と彼等を出迎える人々でごった返す新橋駅にやって来ていた。彼は行進する兵士達の中に「年の頃二十八九の軍曹」を発見し、衝撃を受ける。「亡友浩さんと兄弟と見違へる迄よく似て居」たからだ。浩さんは旅順攻撃に参戦して戦死し、今は「白山の御寺に一年余も厄介になって居る」から、この凱旋軍の中にいるはずはなかったのだ。この新橋事件に誘発され、「余」は翌日寂光院へ浩さんの墓参りに出かける。すると既に彼の墓前で合掌している若い女がいた。彼は物寂びた古い境内に佇むその「花の様な佳人」と一言も口をきかずに別れるが、女の正体が気になり始め、調査が開始される。浩さんが戦地でつけていた日記にその手掛かりを求める。するとその中に「二三日一睡もせんので勤務中坑内で仮寝。郵便局で逢った女の夢を見る」という件を発見する。さらに、「只二三分の間、顔を見た許りの女を、程経て夢に見るのは不思議である」、「余程衰弱して居る証拠であろう、然し衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ来てから是で三度見た」という句が続く。寂光院の女と日記中の女とは同一人物であるに違いないと彼は確信し、「昔はこんな現象を因果と称へて居た。(中略)成程因果と言い放てば因果で済むかも知れない。然し二十世紀の文明は此因を極めなければ承知しない。しかもこんな芝居の夢幻の現象の因を極めるのは遺伝によるより外に仕様はなかりとう思う」として、浩さんと寂光院の女の血筋調査が開始される。

浩さんの家は代々紀州藩士であったから、もと藩の家老であったという老人からそれらしい話を聞き出す。浩さんの祖父にあたる河上才三は江戸詰をしていた頃、向かいの屋敷の小野田帯刀の娘と相思相愛の関係にあった。両家の結婚の日取りまで決まっていたのだが、国家老の伴がその娘に横恋慕し、殿の威光を盾にその娘を奪ってしまったという事実が浮かんで来る。さらに、小野田帯刀の子孫に白山方面に住む小野田工学博士がおり、博士の妹は、わが想いを遂げられなかった帯刀の娘に「よく似て居る」ということもわかってきた。

「余」はいよいよ寂光院の女は小野田の令嬢であると結論を下し(事実、小説の結末部でそれは確認される)、次のように述べる。

余が平生主張する趣味の遺伝と云う理論を証拠立てるに完全な例が出て来た。ロメオがジュリエットを一目みる、さうして此女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する。エレーンがランス

ロットに始めて逢ふ此男だぞと思ひ詰める、矢張り父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔て、脳中に再現する。

漱石は、「趣味の遺伝といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です」と森田草平宛の手紙(39. 2. 13付)で言っているが、この時期の漱石は男女の宿命の出会い——「父母未生以前」の恋——に関心があったようで『幻影の盾』にも暗示されている。白城の騎士キリアムと夜鴉城の姫クララは「小児の時」からの恋人である。しかし両城主の関係が悪化し、ついに戦が始まる。クララは燃えさかる火炎の中で死ぬが、その後キリアムの願を叶えてくれたのは「幻影の盾」である。結末部で、一心不乱に盾を見つめているとクララが現れ、二人は再会を遂げることができるのだ。ところでその盾は、「四世の祖」キリアムが「北の国の巨人」と戦い、討ち倒した時、巨人から贈られたものだ。盾の由来を記す書付には、巨人の「百年の後南方に赤衣の美人あるべし、其歌の此盾の面に触るゝとき、汝の児孫盾を抱いて拵舞するものあらん」という予言が認められてあり、「汝の児孫とはわが事ではないかとキリアムは疑ふ」のである。その時盾に目をやると表に刻まれた「蛇の毛」がうごめき始め、あやしい音が発せられる。「如何にも低い。前の世の耳語きを奈落の底から夢の間に伝へる様に聞かれる、キリアムは茫然として此微音を聞いて居る」とある。ここに前世から彼に発せられた囁きは百年も前から決定づけられていた彼の恋——「父母未生以前」の恋に関するものである。

『薔露行』には、前世の恋の暗示はないが宿命とも言える男女関係が語られる。「二 鏡」では、「鏡に写る浮世のみを見るシャロットの女」が登場する。彼女は窓から外の世界を直接に見たい欲求に駆られることもあるが、それを押し殺して日々機を織る。窓から目を放つ時は自分に「呪いのかゝる時」と定められているからだ。しかし「北の方なる試合」に急ぐランスロットの姿がその鏡に写った瞬間、女は「瞬きもせず」「息を凝らして眼を据える」。鏡の中で、「爛々たる騎士の眼と、針を束ねたる如き女の鋭どき眼」とがはたと出会う。彼女は思わず「サー、ランスロット」と叫び、窓から身を乗り出してしまう。たちまち鏡は粉々に碎け散り、織りかけていた布が女の全身にまつわりからみ、彼女は「シャロットの女を殺すものはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロットの女。わが末期の呪を負ふて北の方へ走れ」と叫びながら倒れる。狭い鏡の世界のみに生きるという暗い宿命を負っていた女は、初めて愛の対象を見出し、わが身の破滅と引き換えに激しい想いを披瀝せざるを得ない。ランスロットの思いは知らされないが、シャロットにとってはそれはまさに運命的な出会いであったことは間違いない。

さらに「三 袖」では、偶々城に一夜投宿するランスロットにエレーンが恋をする。「言葉さへ交わさず、あすの別れとはつれなし」と、一人眠れず、彼女の心は思い乱れる。「我と云ふ個霊の消え失せて、求むれども遂に得難きを、驚きて迷ひて、果ては情なくて斯くは乱るゝなり。我を司どるものゝ我にはあらで、先に見し人の姿なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩ふなり。」とある。

ついには彼女は自分がランスロットになる夢を見る。両者の融合合体はエレーンの激しい願望のなせる術であった。一目見ただけでこれ程までの狂おしいまでの恋は只の恋情ではない。

あるいは『一夜』には、「一声でほとゝぎすだと覚る。二声で好い声だと思ふた」という髭男の言葉を受けて、「ひと目見てすぐ惚れるのも、そんな事でしょか」と女が問う。さらに「惚れぬ事。惚れぬ事. . .」、「然し鉄片が磁石に逢ふたら?」、「見た事も聞いた事もないのに、是だたと認識するのが不思議だ」などの句が続き、一目惚れの神秘が披瀝される。ある男女は、磁石が鉄を引き寄せ一体となるように、極めて自然に結び合う。この不思議な現象の謎を解く鍵は何か。

『趣味の遺伝』の「余」はそれを遺伝に求めた。「余」は「近頃余の調べて居る事項は遺伝と云ふ大問題である」と述べ、「メンデルズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘツケルの議論だの、其弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スペンサーの進化心理説だの」と、遺伝学者を列挙している。そしてリードという哲学者の著作を、寂光院の女や浩さんの日記に邪魔されながら五六分読み続けている時に、「頭の中に電流を通じた感じで」アイデアが閃いた。「さうだ、此問題は遺伝で解ける問題だ」と。

漱石の留学時代後半の研究テーマは、ただ一つ——「根本的に文学とは如何なるものぞ」であった。そしてそのために文学書を読むのは「血を以て血を洗ふが如き手段」として、文学書は一切読まず、心理学・社会学・自然科学方面の研究書と格闘したことは周知のことである。その際遺伝学の研究も大分やったことは上の引用部から窺われるし、また『文学論』の第五編第五章「原則の応用(三)」でもこの分野の学者・研究者を11人ほど列挙し——そのうちワイスマン、ヘッケル、スペンサーの名はここにも言及されるが——それらの学説の順次的推移について触れていることから明らかである。

『趣味の遺伝』が漱石のそうした遺伝学の研究と深い関わりがあるのは、小説の題名からして明白なのだが、この前世の恋の再現というテーマの小説化をどこから思い付いたのであろうか。想像される淵源の一つは「スペンサーの進化心理説」である。漱石がスペンサー(1820-1903)を読んでいたことは幾つかの言及から推定される。例えば、『第一原理』は高校時代に友達の「O」(太田達人)から借りて読んでいるし(5)、あるいは、ウオードの*Dynamic Sociology*の体裁を「スペンサーの総合哲学に類した古風なもの」と紹介している(6)。また蔵書の余白に記入された短評・雑感には、「O君ノ説ハ何故ニSpencerヨリ正シキカ」、「OSpencer G. Allenト同説」、「Oinefficiencyノ曖昧ナル事ハSpencerノmedium activityト同ジデハナイカ」、「OSpencerノ説ナラズヤ」、「スペンサー(Spencer)の『文体論』(Philosophy of Style)も此と同論旨である」(7)などとあり、スペンサーをかなり精読していたことが窺われる。筆者はスペンサーの哲学をここに開陳する資格はないが、生物・心理・社会・道徳上の諸現象を進化と発展の立場から統一理解しようとした彼の哲学は欧米に多くのスペンサー学徒を得た。日本でも明治10年代には彼の著作が相次いで翻訳

され、知識人の間で注目された思想であった(8)。漱石は彼の「進化心理説」からヒントを得て、『趣味の遺伝』を創作したのかもしれない。その影響の可能性は高いと思われる。

漱石はその小説のモチーフをハーンの幾つかの著作から得たのではないかと想像したくなるほど、ハーンも男女の運命的恋について多くを語っている。その一つは“By Force of Karma”(9)である。その論文は次のように始まる。

Modern science assures us that the passion of first love, so far as the individual may be concerned, is “absolutely antecedent to all relative experience whatever.”

引用部はスペンサーの*Principles of Psychology*の“The Feelings”からであるが(10)、内容が少々理解し難いからであろう、ハーンは自分の言葉で、「それ(初恋の感情、訳者注)はあらゆる感情のうちで、厳密な意味で最も個人的なものと思われるが、実は決して自分一人だけのものではない」と言い替えている。さらに論を進めて、初恋をするものには相手を選ぶ選択権がないこと、初恋の責任は生きているものでなく死者にあること。つまり死んだ祖先が子孫の感覚に魔術をかけ、ある乙女に恋をさせる。恋する者の心に起こるショックは死者のそれであり、乙女の手初めて触れて体内を走る電気のような身震いは先祖のそれである。このことは科学も心理学も認めているとハーンは言う。

では何故恋の相手は他の女でなくその女なのか。ハーンは、「死者の選り好みは、進化論的に考えれば、予知(prescience)というよりはむしろ記憶に基づくのである」という説を採る。つまり、過去に自分を愛してくれた女の、あるいは片思いに終わった女の面影や魅力をその乙女に見出すと、先祖は子孫の体内で動き出す。恋の情熱は幾度埋められようとも、決して消滅することも休止することもない。こうして葬られた死者は幾世紀でもかつて自分の愛した人の再来(reincarnation)を待っている。

上述のハーンの論は、先に引用した漱石の「此女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する。(中略)父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔て、脳中に再現する」という一節に纏められる。『趣味の遺伝』はまさにこの観念の作品化と見做すことができる程辻褄が合う。漱石は老人に、浩さんが祖父の才三に「生き写しぢゃ。よく似て居る」と言わせ、帯刀の娘については、「血統と云ふは争はれんもので、今の小野田の妹がよく似て居る」と言わせて、浩さんと浩さんの墓参りをする女が遠い過去において既に相思相愛の関係にあり、この世で「鉄片と磁石」のように引き合うことの当然さを正当化している。小野田の令嬢が老人の屋敷に出入りすることを聞いた「余」は、浩さんもその屋敷で令嬢に会ったことがあるかもしれない、すると「余」の証明しようとする「趣味の遺伝という新説」の論拠が薄弱になることを恐れて、浩さんが屋敷に出入りしたかどうか尋ねる場面がある。すると老人は「いゝえ、只名前丈聞て居る許りで——(中略)せがれ(浩さん、引用者注)は五六歳のときに見たぎり(中略)——其後は頓と逢ふた事ありません」

と言っている。厳密に言うと、五六歳頃に見たきりでその後20数年会っていない浩さんを「生き写しじゃ」と断定できるかどうか疑問であるが、作者はその矛盾をおかしてまでも、二人がそれぞれの先祖に似ていること、そして二人は郵便局でただ一度しか会っていないことを強調しなければならなかった。それは「趣味の遺伝」の法則を小説化するために必要であったからだろう。

初恋における先祖の力については、ハーンは他のエッセイでも論じている。“From a Travelling Diary”(11)では、まずプラトンのイデア説を持ち出し、「美のショックは聖なる観念の世界を魂が突然半ば思い出すこと (the Soul's sudden half-remembrance) であるとし、さらに「初恋のショックは人類の魂の意志力 (the Will-power of the Soul of the Race) 」とするショーペンハウアの説を援用し、またスペンサーの「人間感情の最も強烈なものが最初に発現する時、絶対的に一切の個人的経験に先立つ」という「因果の力」で引用した一節をここでも引いている。そして、無数の先祖たちから受け継がれてきた美の感情は普段は個人の感情世界の中でじっとひそやかに潜在しているのだが、それに似かよったものを外界に知覚すると、たちまちぱっと火が付くのである。あるいは、“First Impressions”(12)では、人間一人ひとりの顔は幾世代にもわたる無数の顔の複合体であるとし、さらに、「ある顔の中に何かを認める場合、それを知覚するのは個人の眼ではない。実際に見ているのは死者なのだ」と述べ、「生者は常に死者の蘇り (a resurrection) 」と纏める。また、“Beauty is Memory”(13)の冒頭部では、ある女から受ける電気ショックは長期間眠っていた自分の先祖の目覚めであり、うごめきであり、彼等の無数の欲望によって惹起されたのだという、同趣旨のことが繰り返される。

同じようなことは、“A Serenade”、“Frission”、“The Eternal Haunter”、(14) “The Idea of Preexistence”、“Some Thoughts About Ancestor-Worship”(15)などにも繰り返されており、今日その説の真実であるかどうかは別として、ハーンが固く信じていたことは明白である。ここで想起すべきことは、ハーンが熱烈なスペンサー学徒であったということである。30代前半に出会ったスペンサーの哲学は、彼のその後の文学的生涯を決定したと言われるほど、ハーンに強大な影響を及ぼした。来日以来さらに進んだ仏教研究は、スペンサーの進化論と仏教の教説の象徴的な調和を彼に確信させたと言われている(16)。上に掲げたハーンのエッセイがスペンサーの影響下にあることは間違いない。すると、『趣味の遺伝』は、「スペンサーの進化心理説」の小説化であれ、ハーンの影響下に生れたものであれ、その遠い淵源にスペンサーがあることは否定できない。

兵隊の行進から戦死が想起され、残された者がその英霊を供養するという『趣味の遺伝』のモチーフと同じものがハーン作品にある。それはまず“A Wish Fulfilled”(17)である。そこでは戦地からの勝利の凱旋ではなく、これから中国へ向かう兵士達が熊本に続々と集合する状況説明から始まる。『趣味の遺伝』の歓喜と喧騒に溢れたダイナミックな光景とは逆に、静粛な町と兵士達の様子が語られる。出征兵の一人で松江での教え子がハーンを訪ねて来る。彼と死後の世界について話し、欧

米の死生観と本質的に異なる日本人のそれを知ってハーンは大いに驚く。日本人は古代ギリシャ人やローマ人と同様に死後も御霊は家に宿り、供え物や供養を受けて家人を守っていてくれると信じている、そして教え子は国のために死ぬことを恐れていない、いやむしろ喜んで死を受容していると、ハーンは一種の戸惑いを覚えながら語る。この西洋人には理解し難い精神を記すのがこの一編の趣意であった。まもなく彼の戦死が新聞で報知され、下男は彼のために祭壇をしつらえ供物をあげる。ハーンは教え子の写真に向かって話しかけるのである。ともあれ、教え子の願いは成就されたのである。『趣味の遺伝』では、浩さんの日記に「軍人が軍さで死ぬのは当然の事である。死ぬのは名誉である。ある点から云へば生きて本国に帰るのは死ぬべき所を死に損なった様なものだ」とあり、ハーンに語る兵士の気概に通じるものがある。帝国のために従容として死に殉ずる当時の兵士の精神一般はこのようなものだった。戦死当日の日記には、「今日限りの命だ。二龍山を崩す大砲の音がしきりに響く。死んだらあの音も聞えぬだろう。耳は聞えなくなっても、誰か来て墓参りをして呉れるだろう。さうして白い小さい菊でもあげてくれるだろう。寂光院は閑静な所だ」とある。ハーンに語る兵士同様、浩さんは遠く離れた本国の肉親あるいは運命的なつながりをもつ「誰か」が自分を供養してくれることを疑わない。

ハーンの“After the War”(18)も、戦死者とその御霊を問題にしたエッセイである。最後の章では、神戸駅から凱旋する兵士達とそれを迎える沿道の人々、歓迎の旗や飾り付けをした街の様子が語られている。しかしここでも群衆は『趣味の遺伝』と反対に、万歳も唱えず、話し声さえたてず、水を打ったようにしんと静まりかえっている。静粛を破るのは歩調正しく歩む兵隊の靴の響きだけである。ハーンの趣意は、下男の言葉——「西洋人は死者は帰らないと思いますが、私達はそうは思いません。日本人の死者で帰らない者はいません。帰る道を知らぬ者はいません。支那から、朝鮮から、無情の海底から死者は帰って来ます。皆帰るのです。彼等は今私達と一緒にいるのです。」——を記すことにあった。

しかし漱石の『趣味の遺伝』の趣意は、勿論ハーンの「満願成就」や「戦後」とは別なところにあった。戦争—死—供養というモチーフは小説の舞台設定にすぎない。作者はそのモチーフを利用して、先祖の男女の宿命的な愛が「数十年」後に蘇るという神秘的観念の小説化を試みた。漱石は、『趣味の遺伝』の批評を寄せた弟子の皆川正禧に、「実は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとかゝんと、前の詳細な叙述^原な比例を失する様に思ひます」(39. 1. 17付書簡)と述べている。その自己批評の通り、竜頭蛇尾といった構成上の欠陥は認めざるを得ないが、一種縹渺とした神秘的世界の創造に成功している。その文学世界は漱石独自のものであり、ハーン作品のモチーフを基にしたかどうかは意味のない詮索かもしれない。しかし漱石がこれらのハーン作品から何らかの刺激を受けたかもしれないという推測は、漱石の神秘的文学世界を理解する上で意味のないことではなからう。

ハーン的神秘思想の特徴の一つは人間を「超個人」(superindividuality) (19)、「複合自我」(a multiple Ego) (20)と捉えることにある。つまりハーンによると、人間の生命は過去の無辺無量の生命の複合体であり、人間の肉体は無限の心霊の複合した物質的顕現である。過去の生命は我々の中に生き、また過去の経験は我々の中に記憶され、ある状況下でそれが偶発する。初恋の一目惚れはその典型である。善や美に対する感動、香り・音声・肌ざわりなども含めた五感の快・不快は過去に受けた複合的記憶の再現なのである。あるものへの恐怖は過去の恐怖の覚醒なのである。つまり生きている現在は死んだ過去の総体なのだ。

初恋の外に先祖の力を示したハーンのエッセイを二・三見てみよう。“Yuko: A Reminiscence” (21)は死者が生者を動かし支配する物語である。ロシアの皇太子に護衛の警察官が斬り付け傷を負わせたいわゆる大津事件で、「天子様御心配」の様子を知った勇士は、ロシア皇帝に償いをし、天皇の悲痛をやわらげるために自分に何ができると切実に思い悩む。すると、「先祖の霊が彼女の心の中で頻りにうごめくのである」。そして「死者が声なき声で」、「西京」で「おまえの一身を捧げよ」と命ずるのであった。彼女は命に従い、京都におもむき、遺書を認め、剃刀で自害を遂げるのである。生身の彼女は、国民全体が一体となって生き、感じ、考えてきた無限の過去にしっかりとつきまとわれた霊の住家 (a spirit-chamber) なのであった、とハーンは語る。

“Notes of a Trip to Kyoto” (22)では六歳の児童による見事な書——大人の書家でもそれを凌ぐものはちょっといないだろうと思われるほど素晴らしい出来栄えなのだが——それについてのハーンの感想が述べられる。その書は小児一人が書いたのではなく、過去の無尽無量の亡霊が書いたものであること、その児の小さな手に、死んだ累代の書家がまざまざと蘇っていることをハーンは感得する。彼は書の見事さよりも、前世の遺伝的記憶という不思議な事実のまぎれもない証拠を提示されて感動するのである。「遺伝的記憶」(23)では一人の男が医者に自分の見る夢について質問する。彼は一度も行ったことのないある場所の夢を百回以上も見ているという。またその夢では、まだ聞いたことのない言葉を耳にするというのだ。その場所へは船で行くのだが、出港する港町の街、住民の様子、さらに到着した都会の堂々たる建物や広場、色は黒いが品のいい住民の服装や飾りもの、そうしたものをかなり詳しく何度も夢に見るというのである。結局その地はインドであり、耳にする言葉は現地語であることが判明する。彼の父がインドにいたことがあり、そこで死んでいるのだ。父親の記憶が子に遺伝した例である。「われわれはその新しいものを、生まれてこのかた見たことも聞いたこともないことをはっきり知っていながら、いつの世か、とにかく無限に遠く隔たった時期に、どこかで見たか聞いたかしたような気がする」のは珍しいことではないとハーンは述べるが、先に引用した漱石の『一夜』の「見た事も聞いた事もないに、是だたと認識するのが不思議だ」と

いう一節と同じことであり、両者の符合は注目すべきであろう。

この「複合自我」とか記憶の遺伝の問題について、漱石にはハーンほどの綿密で精緻な研究はない。しかしこれに関係があらうと思われる漱石の語句に、先に引用した「父母未生以前」というものがある。これは内的苦悶にあった青年・漱石が27年鎌倉円覚寺に参禅した際与えられた禅の公案「父母未生以前本来の面目」から来たものであるが、その後も漱石を捉え、『行人』まで計11度使用されている²⁴。『門』において「本来の面目」に辿り着けず空しく下山する宗助を通してその意味が語られていることは周知のところである。この句は、暗い過去の重荷を負いながら生きていく漱石小説の主人公達の内的苦悩と本質的な関係を持っていることは明白であるが、「遺伝的記憶」とどういった関係を持つのか難しい問題である。しかし漱石が一個の人間を単一の個体としてでなく、生命の連鎖の中で捉えようとする意識から使用していることは明らかである。人間が自己の生命について思いを凝らす時、自分の来し方行く末が不可解な謎であるのは言うまでもない。漱石の34年の「断片」六には、人間存在の神秘について感想めいたものが英語で綴られているが、その中に「Were we born, we must die. —Whence we come, whither we tend? Answer!」という一節がある。これは24年、漱石が英訳した『方丈記』の一節 “Whence do we come? Whither do we tend?” と同じものだが²⁵、この疑問は「父母未生以前」と深い関わりを持つことは明白である。そしてハーンも、西洋人の多くが頭を悩ませている3つの大きな問題として次のように述べる。“These questions we call ‘the Whence, the Whither, and the Why,’ meaning, Whence Life? Whither does it go? Why does it exist and suffer?”²⁶ これは漱石の疑問と同じで、ハーンは“The Idea of Preexistence”で同じ問題を取り上げ、それに対する仏教独特の解答を提示するのだが、それについては筆者の手に余る問題であるから触れない。ただ二人とも人間にとっての究極の問題に深い関心を持ち続けたということを書いておきたい。

漱石は一個の生身の人間として、漠然としたものではあるが、死者が生者に及ぼす力を体で知覚していたことを暗示する一節がある。『心』六十一には、「然し先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたのです。今でも潜んでいるでせう。」とあり、また急死した父と母が「鈍い私の眼を洗つて、急に世の中が判然見えるやうにして呉れたのではないかと疑」うのである。あるいは『思ひ出す事など』十七には、「臆病者の特権として、余はかねてより妖怪に逢ふ資格があると思っていた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れている。（中略）余は常に幽霊を信じた」とある。

漱石はもともと霊的世界・超自然界・神秘的領域に対する興味は深かった。「幽幻は人の常に喜ぶ所なり幽幻の門戸を開いて玄奥の堂を示す者あれば衆翕然として起つて之に应ず智者も此弊を免かれず昧者は勿論なり」と始まる翻訳「催眠術」を『哲学会雑誌』に載せたのは25年で、漱石はまだ学生であった。評論では幻想的小説『エイルキン』に関するものを32年に『ホトギス』に発表

し、作品の非現実的で神秘的な雰囲気を紹介している。あるいは評論「マクベスの幽霊に就いて」(37年)では「超自然の文素」が文学世界に必要であることから説き起し、『マクベス』の中の亡霊の扱い方に漱石独自の見解を披瀝している。また上に引用した『思ひ出す事など』の一節に続いて、漱石はアンドリュ・ラングの『夢と幽霊』を35・36年頃に読み、さらにフランマリオンの『靈妙なる心力』、オリヴァー・ロツヂの『死後の生』を読んだことがあると語り、さらにマイエルやポドモアの「スピリチズムの研究」に触れ、フェヒナーの「地球の意識」には不満を表白するといった具合で、若い頃からの異界への関心は、留学時代の心理学研究によって増幅されたと思われる。

ところで『文学論』は、「凡そ文学的内容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに付着する情緒を意味す」という有名な一節から始まる。漱石によれば、一切の意識はFとして実現するものだから、文学的内容たり得るか否かは、それがfを伴うか否かの一点にかかってくる。第一編第三章「文学的内容の分類及び其価値的等級」において、「情緒は文学の試金石にして、始にして終なり」とし、Fを(1)感覚F、(2)人事F、(3)超自然F、(4)知識Fの4つに分類する。そしてこの中でどれが最も強大なfを起すかを論じていく。漱石はまず(1)から始め、(2)、(4)と進む。この3つに費やすスペースは岩波全集で約10頁であるが、それに対して、最後にまわした(3)はこれだけで18頁である。(3)はさらに、「宗教的、信仰的材料」に関して10頁、幽霊・妖婆・変化・妖怪・不可思議分子・神秘的分子・人間の感応などの「超自然的材料」に8頁割いている。そして漱石は(3)のfが(4)のfより遙かに強烈であることを明言しているが、(1)(2)との比較は避けている。(1)に関して、「此種のものゝ吾人の情緒を呼び起すこと特に強大なるを認むべし」と述べているが、(3)についても同じ見解を持っていたのであろう。こうした事実から考えると、第三章における漱石の主眼は「超自然的材料」が読者に如何に強大な情緒を引き起こすかを論ずることにあつたと言える。ともあれ、漱石の異境への関心は文学理論にも及び、さらに創作をも駆り立てたことになった。漱石文学の初期の作品は「超自然的材料」を扱ったものが多いが、それは、「超自然F」に伴うfの強力なることの確信に裏打ちされたことであろう。『濛虚集』は、読者にどれ程の強いfを与えることができるか、その実験的試みであつたとも言えるのである。

漱石は霊の感応現象をいくつか小説に挟んだ。『猫』二では、迷亭の語る「首懸の松」と、「不思議な事」にそれと「同日同刻位に起こつた」事件——寒月の語る「間違つて橋の真中へ飛び下りる」エピソード——が有名である。作者はゼームズの心理学をもちだして、「副意識下の幽冥界と僕が存在して居る現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだろう」とか、「僕の経験と善く似て居る所が奇だ。矢張りゼームズ教授の材料になるね。人間の感応と云ふ題で写生文にしたら屹度文壇を驚かすよ」と、迷亭に言わせている。

この「人間の感応」は『琴のそら音』でも言及され、漱石の霊的領域への関心の深さを如実に示すものである。冒頭部では「幽霊を研究している」心理学者の津田と「余」との間に、新所帯の

「迷信婆々」のことから、犬の遠吠えと凶事の前兆、祟り、占いなどが話題にのぼる。津田は、従軍中の陸軍中尉の妻である親戚の若い女が、インフルエンザにかかって急死してしまう話を語る。彼女は夫の出征前に、「もし万一御留守中に病気で死ぬ様な事がありましたも只は死にませんで」、「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、もう一遍御目に懸ります」と誓っていたという。戦地の夫はある朝「懐中持の小さい鏡」を取り出して何気なく見ると、「青白い細君の病気に寝た姿がスーとあらはれ」、「黙つて鏡の裏から夫の顔をしげじげ見詰めた」という。夫は細君の言葉を思い出し、「焼小手で脳味噌をじゅつと焚かれた様な心持だと」後の手紙で伝えている。しかも彼が鏡を眺めたのと細君が息を引き取ったのは同日同時刻であったことが判明する。「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の科学的变化を起すと. . . 」と、津田の読んでいた本の一節が紹介される。津田はさらに「ロード、ブローアムの見た幽霊杯は今の話しと丸で同じ場合に属するものだ」などと加え、作者のこの領域への傾斜をうかがわせる。また「余」が津田の下宿から帰る途中、陰気な暗闇の中にぼーと浮かぶ白い布に包まれた幼児の棺桶が現れたり、さらに行くと「赤い鮮かな火が見え」、それは「提灯の火に相違ないと漸く判断した時それが不意と消えて仕舞」ったりする。「余」はその火の消えた瞬間は、インフルエンザにかかっている婚約者の死を告知したのではないか、という暗示に取り付かれてしまうのである。その夜はまんじりともせず、翌早朝婚約者を訪ねると彼女はかぜも直ってすっかり元気になっていた。作者は、ある状況下で一種の自己催眠に陥る人間心理の奇妙さを描くことにあった。

霊の感応の実例は『趣味の遺伝』でも描かれる。「白い小さい菊」は浩さんの好きな花で、「余」が浩さんの家を訪ねると、庭に白い豆菊が咲いている。「白い、小さい豆の様なのが一番面白いと申して自分で根を貰つて来て、わざわざ植えたので御座います」と浩さんの母は言う。寂光院の女が墓の花筒に差したのは、まさしくこれと同種の白い豆菊であった。結部には、「余」が小野田の令嬢に「何故白菊を御墓へ手向けたのかと問」うと、「白菊が一番好きだからと云ふ挨拶であつた」とある。この点でも二人の趣味は一致している。両者の共感、あるいは感応と言える神秘現象である。

『猫』六には、「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜い事に先生は永眠されたから、実の所話す張合もないのだが、切角だから打ち開けるよ。」と迷亭が自分の失恋に終わった初恋談を披瀝する。日の暮れた山中の一軒屋で宿を乞うた時、ろうそくを差し出した娘の顔を見て、彼は「ぶるぶると悸へ」、「其時から恋と云ふ曲者の魔力を切実に自覚した」という。結末は、いかにも迷亭らしく、実はやかん頭の娘であったという馬鹿話に墮してしまふのだが、一目惚れの「神秘」という点では、『趣味の遺伝』やハーンのエッセイに通底するものがある。

ハーンがニューオーリンズ時代に書いた「死んだ恋人」、「死後の恋」という短編がある。前者は1880年10月21日のアイテム紙に、後者は1884年4月6日のタイムズ・デモクラット紙に掲載され

た物。両者の内容は、使用されている語句の違いを除けば、全くといっていいほど同じものだ。熱帯のある町で、ある男がある女に熱烈な恋をするのだが、その想いが遂げられずに死んでしまう。男は自分の肉体が塵となって朽ち沈んでいく墓の中で、心の平安を得ることができない。墓の割れ目から外を覗くと、紫水晶の夏空、背の高いシュロの木立、咲き乱れる花々、海へ注ぐ川などが見え、鳥のさえずり、人々の楽しそうな笑い声、音楽などが聞こえてくる。死人はこうしたものを見聞きするにつけ、もう一度生きたいなと思う。そうこうしてかなりの歳月が経ったある夏の日に、恋した女が「色の白い美人のような美しい幽霊」となって、男のいる墓場にやって来る。「男は彼女の衣ずれの音がわかった。すると、死んだ男の心臓からひとつの花がはえて、それが墓の壁の割れ目をくぐりですと、彼女の前で花をひらいた。そしてむせるような強いかおりのなかに、花のころをかよわせたのである」。しかし女はそれと知らずに通り過ぎ、足音は永遠に消えてしまう。

この小編から、漱石の『夢十夜』（明41）の「第一夜」を想起するのは自然であろう。そこでは、今際の女が枕元の男に向かって、「死んだら、埋めて下さい。（中略）さうして墓の傍に待つて下さい。又逢ひに来ますから」と言う。この構図は、ハーンの「おかめ」、「お貞」、「破約」などにお馴染みのものである。女は「百年」待つよう懇願するのだが、時間の経過は、「女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それが又女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いままのつと落ちて行つた」と、太陽の移動によって示される。「死んだ恋人」でも、「それでも太陽は、あいかかわらず同じように、昇ってはまた沈んで行つた」とか、「金色にのぼった日が、金色の火の玉になって消えていく。——そして、月が夜な夜な、地球の顔を白く照らす」とか、天体の運行で示される。「第一夜」の末段には、「すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い莖が伸びて来た。見る間に長くなつて丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思ふと、すらりと揺らぐ莖の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の蕾が、ふつくらと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた」という一節がある。作品のクライマックスであるこの一節は、「死んだ恋人」の末段と響き合うものがある。死者が男であるか女であるかは本質的な問題ではない。また「死んだ恋人」では、二人は彼岸でも結ばれないという永遠の悲恋を明確に述べているのに対し、「第一夜」では二人の約束が守られ、和合することが暗示されている。こうした差異は別として、長い時間を経て、死者が墓の中から一輪の花と化して、愛しい人に再会するというモチーフにおいて両者は一致する。『きまぐれ草』は1914年（明47）ハウトン・ミフリン社から出版になっているから、この「第一夜」の後である。すると漱石が「死んだ恋人」を読んだ可能性は低いのだが、この不思議な符合は何であろうか。

3

漱石はハーンの著書をどれ程読んでいたのだろうか。「漱石山房蔵書目録」に載っているハーン

の著書は“Interpretations of Literature”だけである(30)。「目録」にはないが、読んだであろうと推定できる著書は、周知のことだが、少なくとも2冊ある。一つは『怪談』である。そのことは、「皆川は(中略)洋書を二冊僕に托して君にやつてくれろといひ置いて行つた一冊はハーンの怪談で御蔭で之を通読した」(38. 1. 1付野間眞綱宛)という文面から明らかである。Kwaidanは1904年(明37)4月ハウトン・ミフリン社から出版されているから、その初版本を読んだに違いない。2冊目は *Glimpses of Unfamiliar Japan* (『知られざる日本の面影』) である。それは『文学評論』で、漱石が「倫敦の住民」の日常生活に触れた一節にかつらの種類に言及した件があり、「閑があれば十八世紀の鬘と云ふ論文を書いたら可からうと思ふ位出て来る。小泉先生の鬘の研究以上の仕事である」という一節からの推定である。ハーンの「鬘の研究」は『面影』下巻18章の“Of Women's Hair”のことであろう。『面影』は1894年(明27)同社から出版されており、読んだ可能性は高い。

筆者は、さらに、漱石はTwo Years in the French West Indies (『仏領西インド諸島の二年間』) (ハーパー・ブラザーズ社、1890) を読んだのではないかと想像する。それを示唆するのは次の文面である。「巴の助といふ人のマコイ釣は面白い末段杯はことに振つて居る。小泉先生の文をよむ様だ」(38. 3. 14付野村傳四宛)。これは雑誌『七人』に掲載された幾つかの作品の一つ——巴之助の『「コマイ釣」の話』——に対する漱石の評であるが、その小品は根室での厳冬期のコマイという魚釣の話である。寒さ厳しい折は岸から一里余りにも海が凍結し、人々は氷の上でかがり火をたきながら釣に熱中する。「末段」で釣の悲劇が語られる。それは、ときにはヤマセ風が吹くことがあり、すると岸に固く凍りついた氷が緩み、氷が岸を離れて遙か沖へ運ばれてしまうという話である。結末部は次のようである。

斯く云ふ日には不思議に釣れる、欲張って居ると陸へ逃げる内に一二丁、折りには五六丁も氷は岸を放れ出して、俄かに小舟を下ろさせる、救ひを呼ぶ女の聲、あわてる者は氷の海へ飛び込んで凍え死ぬのもある、何でも昔の事、若い男女のアイヌが二人、氷にのせられて沖で情死をしたさうだ、その日は慥か一月の十日、夫れで今も一月の十日は漁を休むのだ、その日ヤマセの風が吹かないでも、悲しさうなアイヌの聲が沖にきこえると云つて居た。(31)

ハーンの『西インド諸島』の「マルティニーク・スケッチ」第8章“Ti Canotie”(「箱舟少年」)は、大型客船の乗客から投げられたコインを海中に潜って拾っているうちに沖へ流されてしまう二人の少年の物語である。彼等は手作りのカヌーから、停泊している客船から投げ与えられる銀貨を求めて潜り、海底から拾ってはその巧みな技を披露する。やがて客船は出港し沖に向かう。次第に深くなる海にこんどは金貨が投げ込まれる。無理して拾っているうちに、いつの間にかカヌーは沖に流されて陸地に戻ることはできない。炎天下の昼と恐怖の夜を過ごすうちに幻覚が現れ、一人は死んでしまう。他方は通りかかった船に救助されるという話である。

漱石の「末段杯はことに振つて居る。小泉先生の文をよむ様だ」という感想は、『「コマイ釣」の話』の結部——「その日ヤマセの風が吹かないでも、悲しさうなアイヌの聲が沖にきこえると云つて居た」という、いかにもハーン好みの靈的で神秘的な雰囲気から来たのかもしれない。しかし、より多くの獲物を求めているうちに沖に流され、そして死んでしまうというこの両者に共通した状況設定を見ると、漱石の感想は“Ti Canotie”を念頭においたのではなかろうか。「コマイ釣」はアイヌ人、他方はクリオール人と、異国情緒が漂うところも漱石に似た印象を与えたのではないだろうか。

ハーンが熊本の五高に奉職したのは明治24年11月から27年11月まで、漱石の同校勤務は29年4月から33年（1900）9月までである。漱石が五高を去る年までにハーンの大半の著書——『クレオパトラの一夜その他』（1882）から『影』（1900）までの16冊——は出版されている。その後出版された日本に関する著書は、*A Japanese Miscellany* (1901), *Kotto* (1901), *Kwaidan* (1904), *Japan An Interpretation* (1904), *The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories* (1905)である。常識的に見て、ハーンが勤めた当時の五高の図書館にはハーンの本があったであろうし、また漱石がそれらを目にした可能性もあろう。現在ではそれを確かめる術はないが⁽²⁾、漱石が談話「テニソンに就て」で、「十九世紀以後の文章家としてはド・クインシー、ウォルター・ペーター、スチーヴンソン、キップリング等は主なるものである。其他にも此間死んだハーンさんだとか、ラスキンだとか、（後略）」と述べていることから推測すると、彼はハーンをかなり読んでいたのではないと思われる。英国留学時代およびその後の東大講師時代は、研究課題が山積した創作活動も開始された時期であるから、ハーン文学を繙く余裕はなかったであろう。ハーンは漱石が赴任する1年4ヶ月前まで五高に勤務し、またその当時世界的に文名が上がりつつあったことを考えれば、ハーンに最も親しんだのは五高時代ではなかったかと想像される。

漱石は、「とにかく二代目小泉にもなれさうもないスキフトにもなれさうにない僕のような善人をシニツクの様にかくのはよくありませんよねえ君」（37. 12. 19付野間真綱宛）と、『猫』——『倫敦塔』の脱稿後に軽々しく口を滑らしている。当時の漱石は、少なくともハーンとスウィフトの文学や思想に自分と共鳴する部分を感じ取っていたことは間違いない。スウィフトを「最も強大なる諷刺家の一人である」⁽³⁾と論じた漱石は、「シニツク」と評された自分が、同時代に批判的な眼差しを向けていた「スキフト」に一脈通ずるところがあることに気付いていたであろうし⁽⁴⁾、それが『猫』を次々と紡ぎ出していく時の基本的姿勢であったと言える。また『濛虚集』の超自然的な世界を題材とした短編小説群を書き進めて行く時、彼の脳裏には「小泉」の文学世界が意識されたのである。従ってこの手紙の一節は、奇しくも、毛色の違った二系列の文学世界の創作原理を説明することになっている。この時期の漱石文学にハーンの影響を想定するのも無理なことではなかろう。

明治44年7月10日、漱石は安倍能成等とケーベル先生を訪ねた。漱石は大学院時代彼の美学を聴講し、文科大学で「一番人格の高い教授」としてケーベルを尊敬していた。その訪問記の詳しい内容が当日の日記に記されており、数日後随筆「ケーベル先生」に結実する。その日の話題の一つ一つがメモされ、全部で20にのぼる。最初のメモは、「○「ハーン」の話 アブノーマル」とある。ハーンのことを彼等の話題にのぼったのである。ケーベルはハーンを「アブノーマル」と評したのであろう。「ポーは好だ。ホフマンは猶好だ」という先生の言葉を記すメモは、そのまま随筆に採用されているが、ハーンには一切言及がない。おそらくハーンはケーベルに好意的に語られなかったためであろう。しかしハーンをメモし、しかも最初に記録したことなどからすれば、すでに高名な小説家になっていた漱石にとっても、ハーンはまったく過去の人ではなかった。没して既に7年になるのだが、ハーンは漱石の脳裏から抹消されるような人物ではなかったのである。

注

- (1) 『漱石の思ひ出』 十八「黒板の似顔」(岩波書店、1982)
- (2) 金子健二、(いちろ社、昭和23)
- (3) 夏目漱石述・皆川正禧編、(岩波書店、大正13)
- (4) 以下の引用文は昭和59、60年の岩波全集より採用。
- (5) 『硝子戸の中』九
- (6) 『思ひ出す事など』七
- (7) 全集 第十六巻 214、217、230、234、309頁
- (8) 全集 第九巻『文学論』 567頁
- (9) *Kokoro* (Houghton, Mifflin and Company, Boston and New York, 1896) 所収
- (10) *Kokoro*, p.155
- (11) *Kokoro*所収
- (12) *Exotics and Retrospectives* (Boston, Little, Brown, and Company, 1898) 所収
- (13) 同上
- (14) 以上の3編は同上書所収
- (15) 以上の2編は*Kokoro*所収
- (16) 「小泉八雲と仏教」、『現代のエスプリ 小泉八雲 No91』(至文堂、昭和50) 所収
- (17) *Out of the East* (Houghton, Mifflin and Company, Boston and New York, 1895) 所収
- (18) *Kokoro*所収
- (19) “First Impressions”, *Exotics and Retrospectives* p.192
- (20) “The Idea of Preexistence”, *Kokoro* p.231

- (21) *Out of the East* 所収
- (22) *Gleanings in Buddha-Fields* (Boston and New York, Houghton, Mifflin and Company, 1897)
所収
- (23) 『きまぐれ草』所収。原文が手元がないので『飛花落葉集他』（恒文社、1976）を参照した。
- (24) 全集 第十七巻『索引』による。
- (25) 漱石は子規宛ての手紙（23. 8. 9 付）に、「知らず生れ死ぬる人何方より来りて何かたへか去る又しらず仮の宿誰が為めに心を悩まし何によりてか目を悦ばしむる」という『方丈記』の一節を引用している。『方丈記』英訳は翌年となる。
- (26) “In Yokohama”、*Out of the East* p.314
- (27) 『きまぐれ草』所収
- (28) 何故百年なのかはわからない。前述したように「幻影の盾」は百年前に贈られ、『夢十夜』の「第三夜」の子殺しが百年前のことであった。ハーンは“A Wish Fulfilled”で、日本人は死者を百年間供養することになっていること、死者はその後生まれ変わったり神になると言う人もいる、と語っているが、それと関係があるかもしれない。
- (29) 田部隆次『小泉八雲』（北星堂、昭和55） 242頁。
- (30) 全集 第十六巻 829頁
- (31) 佐藤春夫編著『漱石の読書と鑑賞』（小山書店、昭和17）
- (32) 熊本大学附属図書館情報サービス課閲覧係の北野氏を煩わし、少なくとも34冊の著書が現在までに購入されたことが判明した。しかし購入時期や漱石が読んだかどうかの手掛かりはない。
- (33) 『文学評論』第四編「スウィフトと厭世主義」
- (34) 鈴木善三氏は「漱石とスウィフト——開化の中の厭世主義者」（『宮城学院女子大学英文学会誌第24号』1996. 3. 10 所収）で、両者の伝記的事実や時代批判者としての類似性について詳しく述べておられる。

